

支援のあり方:ラオス

須賀 努

コラムニスト・アジアウオッチャー

ラオスというところのような印象をお持ちだろうか。良く日本ではインドシナ三国と言いがするが、あれはフランスがベトナム、カンボジア、ラオスを植民地化した結果、定着した呼び名。実は文化圏としては全く異なる。ベトナムは儒教圏、カンボジア、ラオスはヒンズー教圏、更にベトナムは南北で文化が分かると言ってもよいと思う。当然慣習や思考法も異なるし、一緒にすることは出来ない。

そしてラオスは小国である。人口は僅か600万人。一時カンボジアと並んで「チャイナ+ワン」の候補と言われたりもしたが、人口を見ただけでも、+ワンになりえないことは明白。更にこの実にゆったりとした時間の流れる国と中国が同じ土俵で競争するなど有り得ないことは、一度訪れれば分かるであらう。

中国の台頭

6年ぶりにラオスの首都ビエンチャンを訪れた。ヤンゴンやプノンペン、ハノイなどはここ数年の間に大きく街が変化したが、ビエンチャンの旧市街は相変わらず高い建物はなく、落ち着いた佇まい。そ



写真1 中国の援助で建てられたビエンチャン文化会館

れでも少し郊外へ行くと、建設資材などを扱う業者が急増したように見える。空港近くには新中国市場まで出来ており、まだお客は多くないものの、中国雑貨からラオスの民族服まで何でも売っている。そしてその会社の看板には殆ど漢字の文字が見られ、しかもそれがどんどん大きくなっていると言う。「中国のラオスへの攻勢はかなりの勢いがあり、援助は相当額に上る」と地元華人は話す。

一番の象徴が11月5-6日に第9回アジア欧州会議(ASEM)の首脳会議がビエンチャンで開催されたこと。野田首相も出席したが、日本の報道は尖閣問題を巡る日中首脳対応と日本の衆議院解散に注目が集まり、残念ながらラオスに関する報道は少ない。野田首相は異例の3泊をビエンチャンで過ごしたのだが、一体何をしていたのだろうか。

一方中国は最も大切な5年に一度の共産党大会を目前に控えたこの時期に温家宝首相がラオスを訪問、中国の無償援助で建設された首脳会議会場となる会議センターの開所式に出席するなど活発な外交を展開した。因みにこの会議センター、中国企業が受注、中国人労働者を入れて突貫工事で完成させたらしい。現在の中国の海外援助の方式の一つの典型例であらう。

尚このASEMはラオスにとって大規模な国際会議へのデビュー戦といった様相があり、空港から市内に入る幹線道路には30mおきに兵士が配置され、水も漏らさぬ厳戒態勢が敷かれた。市内の交通量も制限され、各国代表車の後ろにはトラックに乗った銃を持つ兵士が同行していた。この物々しさにビエ



【須賀努氏のプロフィール】

東京外語大中国語科卒。
金融機関で上海留学、台湾2年、香港通算9年、北京同5年の駐在を経験。
現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。

撮影：佐渡多真子



ンチャンの緊張が伝わってきた。

ラオスは元々ベトナムの影響力が強い国との印象があるが、最近では中国からの攻勢、そしてアジア回帰を目指すアメリカからの攻勢もあり、巧みな駆け引きで上手くバランスを取りながら、自国の利益を図って来ている。

ラオスの歌姫による障害児支援

今回ビエンチャンを訪れた理由は ASEM ではなく、6年前に訪問したラオスの歌姫、ノイ・センスリヤーさんの活動をフォローアップするため。彼女はオーストラリアの大学で建築を専攻、流暢な英語を話す。10年前にはミスビエンチャンにも選ばれ、その後歌手としても活躍しているラオス人女性。日本的に言えば、才色兼備。

そのノイが数年前から音楽と踊りを通じて障害を持つ子供達の機能向上を図るプロジェクトに取り組み始めた。ラオスには優れた民族音楽と舞踊があり、それを障害克服に活用しようとする試み。実際にノイが運営する学校を訪問し、ここに通う児童を見てみると、とても障害があるとは思えないほど、はっきりとした声で歌い、独特の緩やかな動作の踊りはセラピー効果があるようだ。

今回は東京のある支援者達と一緒に訪ねたのだが、何と訪問3日前に突然「文化会館で子供たちのコンサートを行う」との通知。当日は数百人の観衆の前で子供達がフォーマルな衣装を着て登場、堂々としたパフォーマンスを披露し、一同大感激。ただ感激したのは我々だけではなかった。児童の親御さんに話を聞くと「臆病だったうちの子があんな大きな舞台で堂々と歌っていた。家族全員涙を流して喜



写真2 障害を持つ子供達と踊るノイ

んだ」と。ラオスでは一般的に障害を持つ子供への風当たりは強く、親でも子供が理解できずに、絆が崩れてしまうことが多いという。どうしてよいか分からない親たちの救いの場としてこの学校が徐々に認知されてきている。

また今回のコンサートはタイ人ボランティアの若者によって支えられ、会場にはシンガポールやマレーシアの支援者も応援に駆け付けて来ていた。このプロジェクトはラオスだけではなく、東南アジア全体の注目を集め始めており、この6年間、確実に前進していることが感じられた。

ノイに今後のことを聞くと「早く寄宿舎付きの学校を建てたい。障害を持つ子供達が自宅から通ってくることは実に困難なこと。また田舎の子供たちを救う手段が欲しい」と訴える。日本も含めて非常に参考になるプロジェクトだと思われるので、支援者が現れることを願いたい。

日本企業はラオスを小国として考えるのではなく、統合される ASEAN 全体の枠組みの中再検討すべきであり、その活用を考えても良いのではないだろうか。中国的な強引な手法ではなく、日本らしい支援を行い、日本や企業のプレゼンスを高めるなど、地道な努力が求められているような気がする。